

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18530625

研究課題名 (和文) 幕末維新期来日外国人の平田国学研究にみる教育の近代化

研究課題名 (英文) Educational Modernization of the Studies on Hirata-Kokugaku by Foreigner during the Bakumatsu-Ishin period

研究代表者

熊澤 恵里子 (KUMAZAWA ERIKO)

東京農業大学・教職・学術情報課程・准教授

研究者番号：90328542

研究成果の概要：幕末維新期来日外国人の平田国学研究の事例として、アーネスト・サトウとペーター・ケンペルマンを中心に日英独における史料調査・収集を行った。ドイツ書記官ケンペルマンについては、先行研究がなく詳細は不明であったが、本研究では現地調査により出自、学歴、職歴をはじめ、その人物像ならびに平田国学への関心を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	420,000	2,720,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育史

キーワード：教育学・日本史・社会学・思想史・哲学

1. 研究開始当初の背景

(1)1869年に平田篤胤の著述に感銘を受けて平田家塾気吹舎に入門を申し込んだプロイセン人通訳(ペーター・ケンペルマン)がいたことに注目した。ケンペルマンが入門しようとした動機は何か。平田国学の何が彼をひきつけたのか。

(2)イギリス人外交官アーネスト・サトウも平田本を収集し、神道に関する論文もあり、平田国学に関心を示した一人である。ケンブリッジ大学図書館所蔵アストンコレクションのサトウ蔵書は、来日外国人の関心事が何であったのか、手がかりを提供している。

2. 研究の目的

(1)幕末維新期に来日した外国人が平田篤胤の著書を収集し研究を行うと共に、日本における「教育の近代化」について言及している事実に着目し、彼らが平田国学研究に至った経緯とその研究方法および内容、成果について歴史的、思想的にその実態を明らかにする。

(2)従来の研究は日本人がそのように西洋文化を受容したのかをテーマとしたものが多かったが、本研究では来日外国人がどのように日本文化を受容したのかを解明する。

(3)「教育の近代化」とは何かを問い直す。

3. 研究の方法

(1)研究対象とする来日外国人は、イギリス人アーネスト・サトウ、ドイツ人ペーター・ケンペルマンであり、欧州での史料調査を行う。サトウ関係調査は、イギリス・ケンブリッジ大学図書館に、ペーター・ケンペルマン関係調査はドイツの外交史料館、ミュンスター市文書館などで実施する。

(2)ドイツ東洋文化研究協会にはドイツ人以外にも数多くの外国人が所属していた。会報（論文・名簿も含む）の分析を行う。

4. 研究成果

(1) ケンペルマンと平田国学（概要）

明治2(1869)年12月28日付両親宛平田延胤書簡に、「一、過便申上候哉、フロイス之ケンプルワンと申者此方へ入門いたし度よし、差支ハ無之哉と島村、岩根より聞合ニ付、福羽へも相談いたし候処、先ツ差支ハ有之間敷旨答ニ御座候、乍去不容易事共ニ付、此方へ参事ハ断り置申候、此夷人古道大意ヲ見て大ニ感心いたし候由、実ハ目出度事ニ御座候」とあり、外国人入門に関する記述は後にも先にもこれが初めての記述である。プロイセンの関係者と照合すると、「ケンプルワン」と称する人物は、代理公使マックス・フォン・ブランツ時代の通訳官ペーター・ケンペルマン (*Peter Kempermann*) であると判明する。また、この入門問い合わせを仲介した島村・岩根については定かではないが、明治2年11月14日、和歌山藩が兵制改革のために招聘したプロイセン歩軍小隊長カール・カップピンの「止宿所」詰として、島村清五郎という人物が任命されている。ケンペルマンの気吹舎入門は当時の政治状況を慮って実現しなかったようであるが、ケンペルマンが平田篤胤の「古道大意」を読み、自ら古道学研究を志した点は、来日外国人による日本研究の深化過程を考える上で注目に値する。

ケンペルマンについては、「明治元年本邦駐在各国外交官及領事館人名録」に「P・E・

KEMPERMANN (通訳官) ○任命及着任ノ期不明、外国語ニ依ル資格ニ関シテハ明治元年七月廿八日(一八六八年九月一四日)附ニテ同人ヲ *Dolmetscher* (通訳官) ト記シタル普魯西代理公使 *Von Brandt* ヨリノ来翰アルヲ以テ通訳官ナリシモノト認メラル」と記載され、その後の日独の研究でも特に取り上げられることなく現在に至っている。著者のその後の調査では、ケンペルマンは、マックス・フォン・ブランツの推薦で通訳見習として採用され21歳で来日した将来有望な若者であり、彼の日本滞在は約10年にも及んだ。フォン・ブランツのもとで通訳官をつとめる傍ら、1873年に設立された「東アジア自然・民俗学のためのドイツ人協会」*Der deutsche Gesellschaft für Natur und Volkerkunde Ostasiens* に設立メンバーとしても参加し、同協会紀要 *Mittheilungen Der deutsche Gesellschaft für Natur und Volkerkunde Ostasiens* に平田国学ならびに神道に関する論文が数編採録されている。1877年秋には、岡山から出雲までを人力車で旅し、その紀行文を同紀要に寄稿している。

(2) ケンペルマンの生い立ち（独現地調査）

ケンペルマンの出生地であるクレフェルドは、ライン川下流に位置するシルクとベルベット産業を中心とする都市である。市の広報誌によると、1373年に中世の街としてチャーターされ、17世紀に定住したプロテスタント・メノン教徒によりシルクとベルベットがこの地にもたらされ、以来織物産業と貿易により大きく発展した。

クレフェルド市立文書館所蔵文書から、ケンペルマンの出生記録を見出した。

Kempermann Peter Franz Marz 1,1845
と出生届には記されている。これは、ベルリンの外交史料館にある自筆史料の内容と一致する。また、住民記録から、両親の名前が

確認できた。Aelgassen Margretha 29
Jury 1814 Johann Kempermann マルグ
レッタ・エルガッセンが母親で、ヨハン・ケ
ンペルマンが父親である。1814年7月29日
に結婚し、この名簿が作成されたときにはす
でに未亡人となっている。ヨハンは、1856
年の住所録では、Kempermann Johann,
Backknecht Konigsstrasse 116 とあり、
「使用人」と記載されている。クーニツヒ通
りは、現在クレフェルド駅から伸びる中央通
りに連なり、市の中心街で高級店舗が並ぶ一
角にある。モダンなビルで昔の面影はないが、
一階はロイド洋品店、上層階はアパートとな
っている。1859年・1866年の住所録にも同
住所が記載されている。職業は確定できない
が、1863年の住所録にはダイナー(召使い)、
1873年にはウェーバー(職工)とある。1876
年の住所録では、ウィッテ(未亡人)とある
ので、ヨハンは73年から76年の間に死亡し
たと考えられる。未亡人となったマルグレッ
タは、その後しばらく街の南東に伸びるブル
ーメン通り 53 番地に住んだ。その住所には
現在 1900 年に建設された建物があり、現在
はクレフェルドの研磨ベルト専門家がオフ
イスとして使用している。

ケンペルマンは、父親が使用人という、経
済的にはあまり余裕があるとはいえない環
境で育った。当然ながら、通訳見習としての
ケンペルマンの採用は、彼の勉学の賜物であ
ったと想像できる。

(3) ケンペルマンの学歴

ケンペルマンは、1845年3月の生まれか
ら算出すると、6年後の1851年9月に小学
校(グランドシューレ、4年間)へ入学し、
1855年9月には、ミュンスター市の9年制
のギムナジウムに進学したことになる。自筆
履歴には、小学校はクレフェルドのラテン語
学校に通ったと記されている。

クレフェルドの学校史によると、1858年
の統計では、街の人口は48906人で、うちカ
トリック教徒が34805人、プロテスタントが
125517人、オランダ・メソ派827人、ユ
ダヤ教徒757人、小学校は20校あり、生徒
数は6592人で、うち男子生徒は3480人、女
子生徒は3112人であった。小学校の内訳は、
カトリック学校が12校、プロテスタント学
校が7校、ユダヤ学校が1校で、その半数以
上をカトリック学校が占めている。1816年
の学校数は、カトリック学校2校、プロテス
タント学校3校の計5校であったことを考え
れば、約40年間の間にクレフェルドの産業
が急成長し、人口が倍増したことがうかがえ
る。しかし、当時クレフェルドには、古典語
を必修とした伝統的なギムナジウムは設置
されていなかった。高等小学校はあったが、
その上級学校は、1867年になり実科学校が
創設されただけであった。

(4) ギムナジウムから通訳官への道

ケンペルマンが入学したギムナジウム・ポ
ーリナム(Gymnasium Paulinum)は、797
年に創設のミュンスター市で一番古いギム
ナジウムである。学校紹介には、「ヨーロッ
パで最古のギムナジウム」と紹介されている。
ミュンスター市はかつてハンザ同盟の一員
として栄えた中世の都市で、30年戦争のウェ
ストファリア条約締結の地、また、ミュンス
ター大学があることでも知られている。現在
でもヨーロッパ各地から学生が集う学問の
都である。宗教的には意外にも、カトリック
教徒が大半を占めると言われている。

ギムナジウムは9年制の教育課程で、最上
級学年の9年生の時に、高校卒業(大学入学)
資格試験であるアビトゥアを受ける。ギムナ
ジウム・ポーリナムの1864年~65年度の年
報によると、在籍者671名のうち、9年生が
49名となっている。アビトゥア合格者は48

名で、その名簿の中にケンペルマンの名前も確認できる。名簿はアルファベット順で、48名の名前、出身地、宗派、最高学年滞在年、勉学、場所が記載されている。ケンペルマンは17番目にあり、出身地（クレフェルト）、年齢（20歳と4分の1）、宗派（福音カトリック派）、最高学年滞在年（2年）、研究（文献学・歴史学）、場所（ミュンスター）と記されている。他の47名については、出身地は半数が地元ミュンスター、年齢は18歳半から22歳で、宗派は圧倒的に福音派カトリックが多い。9年生滞在年はケンペルマンと同じく2年が一番多い。「研究」とは、おそらく大学で希望する専門分野であると考えられる。軍事・建築・医学・神学・法学・数学・自然科学など、多岐にわたっている。「場所」は、入学を希望する大学の所在地であると予想されるが、神学を希望する生徒が過半数を占める。したがって、神学研究で定評のあるミュンスター大学への入学希望が過半数にもものぼる。ケンペルマンが研究しようとした文献学（Philologie）は、民族や文化を歴史的に研究するための学問分野で、外交官にとっては役に立つ研究分野の一つであるといえよう。

ケンペルマンが受講したギムナジウム・ポリーナムにおける最上級生の授業内容（Coetus）は、①宗教学②数学③物理学④歴史と地理⑤ラテン語会話⑥ギリシャ語会話⑦フランス語会話⑧ヘブライ語会話、の8科目であり、自然科学・社会科学・人文科学のすべてを網羅し、語学を重視している点が特徴である。教育内容は前出の外交官試験の内容との共通性が認められる。

(5) ケンペルマンの日本研究：「東アジア自然・民俗学のためのドイツ人協会」への参加
「東アジア自然・民俗学のためのドイツ人協会」*Der deutsche Gesellschaft für Natur*

und Volkerkunde Ostasiens”は、1873年マックス・フォン・ブラントラ、横浜・江戸に居住するドイツ人を中心として組織された。5月1日に開催された第1回目の例会では、会員52名が参加した。例会は、基本的に月1回で、横浜と江戸（東京）で交互に開催されている。第2回目の例会には、江戸在住のアーネスト・サトウが入会している。サトウは論文を協会へ寄贈する等、同協会との関係はあるが、どの程度の貢献をしたのかについては今後の検討を要する。

ケンペルマンは設立当初から積極的に研究発表を行い、フォン・ブラントの北京赴任後は1878年3月から1879年1月まで議長をつとめた。1879年1月29日に香港副領事に就任しているが、実際に赴任したのは数ヶ月後であったようで、同年2月、4月の例会でも議長をつとめ、5月から交代している。1881年4月付の会員名簿からは「アジア」*Asien*または「日本国外東洋研究者」*Ostasian Ausser Japan*として、ケンペルマンの名前が記載されている。

ケンペルマン訃報は、1901年2月6日の例会（横浜）でレーマン議長により伝えられている。例会の記録に、「当協会の設立参加者で、公使館員ならびに総領事のケンペルマン氏が、1900年11月6日にシドニーで死去した」とある。

(6) ケンペルマンの日本研究：日本研究論文の発表

ケンペルマンは、第1回目の例会から日本研究を発表し、紀要*“Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur-und Volkerkunde Ostasiens.”*に次の4本の論文を発表している。この他、日本の封建制度、神道、言語などに関する発表も行っている。論文のタイトルは、*“Die Gesetze des Iyeyassu”(1873.5)*、*“Beirtraege zur*

kennzeichnung der Kami Lehre”(1874.2)、”Die Kami Yo No Modji oder Gotterschrift”(1877)、”Reise Durch Die Central-Provinzen Japans: Mit einer Karten-Skizze der Provinz Idzumo”(1877)、である。このうち神道研究に関しては、アーネスト・サトウの神道論に先んじて例会発表、論文掲載がなされており、論文内容の精査は、翻訳作業とともに現在進行中である。

(7)その他

松平康荘の英国農業留学における平田国学の影響

春嶽の孫松平康荘が 1889 年に英国サイレンセスター王立農学校 (Royal Agricultural College, Cirencester RAC と略す) へ留学しているが、なぜ農学をえらんだのか。

康荘は幼い頃から松平家家督相続人としての教育を施された。教育方法は祖父慶永をはじめ、在京旧福井藩重臣合意の上で決定されている。下等小学→慶応義塾→学習院というルートが、康荘の欧州留学への布石となった。1884 年、17 歳の康荘は兵学修業のためドイツへ留学した。これは旧藩時代の士の職分の延長線上に存在するものであった。その後農学修業へと転じた理由を示す直接的な史料は見出せないが、「立国ノ大本ハ農業ノ隆昌ヲ促進スルハ農ヲ賤シムノ旧弊ヲ打破シ上流者自ラ躬行実践シテ以テ範ヲ当業者ニ示スノ捷徑ナルコトヲ察シ、則チ愛孫康荘ヲ海外ニ派シ農学ヲ専修セシメントス」の一文から、慶永の助言が判明する。慶永の側用人中根雪江は「百姓は国の本」「宝」と説いた平田篤胤の生前門人であり、慶永も篤胤本を多数所蔵していることから、その影響も考えられる。

RAC は 1845 年に王立の称号を付与された、化学分析による近代的農業経営及び農業教育を特色とした英語圏で最初の農学校であ

る。康荘が帰国後創設した松平試農場は、農学研究と農業実践を併せ持った施設であった。RAC における康荘は日常会話には不自由せず、農業実習や農業簿記では優秀な成績を収めたが、分析学や物理学の勉学には苦勞している。これは、当時の日本と欧米の理化学系の学問の「差」を物語っている。

康荘は、旧士族がこぞって軍人を目指すなかで、サイエンスとしての農学と実際の農業を学び、故郷福井に帰ってその知識と技術を地域発展に生かした功績は大きい。康荘の教育は、新しい時代の華族の子弟教育の在り方を示したものとしても大変興味深い。

これは本研究課題の延長上にあるものとして今後も追究していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 熊澤恵里子、《研究ノート》ケンペルマンと平田国学、日独文化交流史研究、10 巻 (2008 年号)、2008 年、55~69 頁、無
- ② 熊澤恵里子、万延元年閏三月より文久三年十二月金銭入覚帳、国立歴史民俗博物館、146 集、2008 年、127~181 頁、有

[学会発表] (計 3 件)

- ① 熊澤恵里子、松平康荘の英国農業留学、日本英学史学会例会、2009 年 3 月 7 日、台東区民会館
- ② 熊澤恵里子、ケンペルマンと平田国学、日本独学史学会、2008 年 7 月 26 日、旧松本高等学校本館
- ③ 熊澤恵里子、平田家塾気吹舎における学びの形成、第 44 回中等教育史研究会、2007 年 9 月 21 日、四国学院大学

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況（計0件）

〔その他〕

① 報道関連等

「松平康荘・春嶽の孫、福井に試農場創設：英留学時貴重な写真 熊澤・東京農大教授が発見 先端農業振興の礎」、福井新聞、2009年4月20日（月）、10頁

② ホームページ等

東京農業大学教員 熊澤恵里子

<http://www.liaison-net.com/ridb/ridb?ucode=189&usno=102319>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊澤 恵里子 (KUMAZAWA ERIKO)
東京農業大学・教職・学術情報課程・
准教授
研究者番号：90328542

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし